

[シンポジウム：家族看護学，その専門性とは]

## 1. がん看護領域における家族援助の現状と分析 —患者・家族とともに在ること—

北里大学病院総合相談部がん看護専門看護師

近 藤 まゆみ

私は現在、特定機能病院としての大学病院において、がん看護領域の専門看護師として働いている。入院中の患者やその家族に関して、看護を提供している看護師からの相談を受ける業務が活動の一部であるが、活動を開始した当初に比べると、臨床の看護師たちの関心が患者だけでなく家族にも向けられることが多くなったと感じる。

がん医療の場面においては、がんという疾患の特徴もあり、病を得た患者自身と患者以外の家族に対して、医療者が知らせる情報の質や量に相違が生じ、そのため患者と患者以外の家族の距離はおのずと離れてしまった。家族のなかに発生した情報の相違は、一見、大切な人を守るために作り上げられたように見えるが、闘病過程を歩むたびに、その壁は高くなっていく。そして、その作りあげた壁によって、家族（患者も含む）は大きな苦悩を抱え込んでしまったのである。

そのような家族に対し、看護師は患者の悲嘆過程への援助に患者以外の家族の支援を期待し、別の側面では家族の悲嘆過程を支えようと試みている。そ

こには患者と患者以外の家族を区別して関わろうとする傾向があり、看護師のなかでは、家族は患者にとって環境の一部であるという捉え方が主流ではないかと思われる。

このような現状のなかで、患者の人権の尊重やQOLなどの観点から、患者自身へ告げることが多くなり、家族（患者も含む）のなかでお互い支えあいながら闘病過程を乗り越えていく家族に多く接するようになった。家族が自分たちの持つ治癒力、対処力を自然に発揮できるように、我々看護師はその家族の体験の過程とともに在ることが重要であり、家族の変化をともに歩むことが大切であると考え。ここでは、家族の抱える問題や課題が、看護師の期待する、あるいは考える“あるべき姿”になるように目標・計画をたてるという操作性を持った看護介入ではなく、予測不可能な変化を遂げるであろう家族に対し、ともに存在し、関心を示し、語り合うという看護介入を通して、家族自身が自分たちのあるべき姿を見つけることが重要であると思われる。